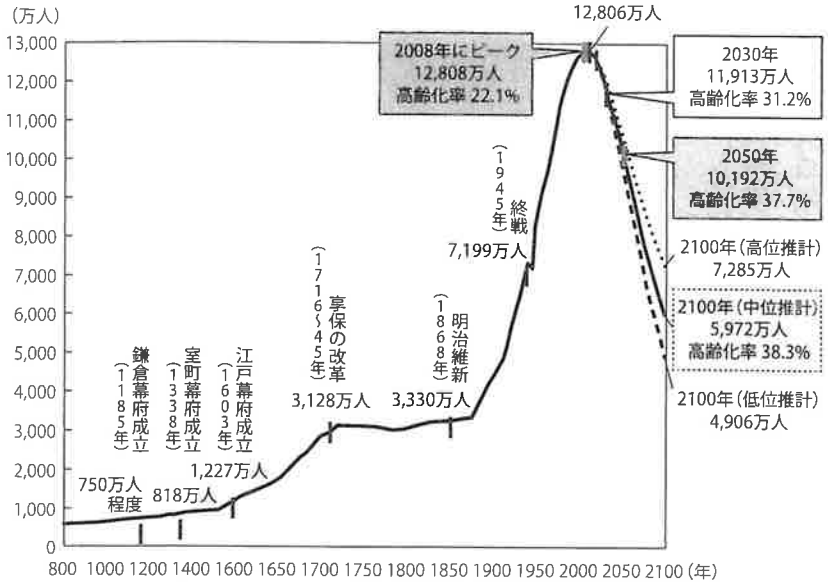
図表 1-1　日本の総人口の長期的トレンド



（出典）国土庁「日本列島における人口分布の長期時系列分析」（1974年）
ただし、1920年からは、総務省「国勢調査」、「人口推計年報」、「国勢調査結果による補間補正人口 平成17年及び22年国勢調査の結果による補間補正」、国立社会保障・人口問題研究所「日本の将来推計人口（平成29年推計）」により追加
（出所）国土交通省資料

新たな状況に対して、発想や対応を転換して新たなスタンスで臨んでいけば、むしろそこに様々なプラスの可能性も開けてくると私自身は考えている。そうした点は、本書全体の中で様々な話題にそくして吟味していきたい。

さて、日本が迎えている人口減少社会という状況についての基本的なイメージをもつ意味で、図表1-1を見てみよう。この図は日本の人口の推移を長い時間軸でとらえたもので、横軸の一番左は800年、つまり京都に都が移った頃（平安京）である。

そこから日本の人口はほぼ横ばいに推移しており、やがて江戸時代の前半で若干人口が増え、その後江戸時代の後半は3000万人強の人口で推移し、ある種の〝人口定常〟社会――農業を基盤とする定常型社会――であったことが示されている。

ここで少し立ち止まって考えてみると、江戸時代にはもちろん様々な課題があったわけだが、本格的な人口減少社会にならず「定常的な人口」を〝維持〟できていたという点は、積極的に評価しうる面をもっていたとも言え、これは人口減少が本格化している現在の日本に視座を置いてこそ立ち上がってくる見方である。

再び図表1-1に戻ると、人口が概ね定常的であった江戸時代までに比べて、明治以降は線が〝直立〟するぐらい人口が急激に増えている。これは〝黒船ショック〟と呼ぶべき現象がすべての起点であり、つまり欧米列強の軍事力、そしてその背景にある科学技術力にいわば〝度胆を抜かれ〟、これでは日本が占領され支配されてしまうという意識のもと、強力な「富国強兵」の道をたどっていった歴史をそのまま表している。

少し角度を変えて表現すれば、それは「17世紀前後から勃興した〝世界資本主義の大きな渦〟に、アジアの辺境にあった日本という国が巻き込まれていった」プロセスそのものだったとも言えるだろう。

やがて第二次大戦終戦以降になると、今度は「経済成長」ということが国を挙げての目標と

広井(2019)『人口減少社会のデザイン』